

世田谷区
お お や ま み ち (矢倉沢往還)
大山道マップ

大山道は、江戸の赤坂を起点として、今の国道246号線とほぼ同じルートをたどり、伊勢原(大山)、さらには秦野、松田を経て、矢倉沢関所に続く脇街道です。

江戸時代中期には、「大山詣」が一ブームとなり、信仰や物見遊山を目的とした旅人で大変賑わいました。葛飾北斎、歌川広重にも描かれ、古典落語にも登場する歴史ある道です。

かつて区内には、大山の山開きの間、夜通し歩く人のために「大山灯籠」を灯したり、日照りの時に大山に雨乞いに出かける風習などがあり、地域の生活に深く関わってきた道です。今も、道端にたたずむ道標がその名残を留めています。

大山道や沿道の今昔を楽しみながら、まちの歴史を学び、健康増進にもご活用いただけるよう、このマップを作成しました。



32. 真福寺

小田原北条氏の家臣飯田図書の開基と伝えられ、大山道沿いの山門が赤塗りであったことから赤門寺とも呼ばれてきました。



40. 瀬田玉川神社

大山の夏山開きの7月27日には神社の境内に大山灯籠を立て、日照り続きのときは、村人が集まり雨乞いも行われていました。



34. 無量寺

用賀の観音さまとして有名で、本堂の前庭には、樹齢100年以上と言われる大イチョウがあり、世田谷百景に選ばれています。



48. 次大夫堀脇の道標(庚申塔)

安永6年(1777)瀬田村の講中に建立され、道しるべを兼ね『南大山道、右東目黒通、左赤坂道』と刻んであります。



22. 世田谷代官屋敷
江戸時代彦根藩世田谷領の代官を代々務めた大場家の居宅。主屋と表門が国の重要文化財に指定されています。



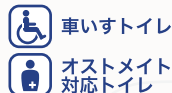
23. ボロ市
小田原の北条氏政が世田谷新宿に樂市(六斎市)を許可した事が始まり。今も1月と12月の15・16両日に開かれています。



大山道旅人の像

大山道 世田谷区 マップ

凡例



大山道
道路



キャロットタワーからの眺望

街道めぐり

大山道マップ区間別・コース別距離

	始点	終点	区間距離(km) ※小数点第三位四捨五入	備考
①	池尻稲荷	三軒茶屋	0.9	
②	三軒茶屋	用賀口道標	2.5	
③	用賀口道標	延命地蔵	2.3	
④	延命地蔵	二子の渡し	1.4	慈眼寺線
⑤	三軒茶屋	延命地蔵	4.6	桜新町経由
⑥	延命地蔵	二子の渡し	1.6	行善寺線
①② ③④	用賀口道標～延命地蔵～慈眼寺ルート		7.2	
①② ③⑥	用賀口道標～延命地蔵～行善寺ルート		7.3	
①④ ⑤	(桜新町)～延命地蔵～慈眼寺ルート		6.9	
①⑤ ⑥	(桜新町)～延命地蔵～行善寺ルート		7.1	

歩いた距離から、消費エネルギーを計算しよう

歩いた距離 あなたの体重(荷物の重さも足して) 消費エネルギー

0.5kcal × km × kg = kcal

<例> 体重60kgの人が荷物2kgを持って3.5km歩くと・・・
0.5kcal × 3.5km × 62kg = 108kcal

消費したエネルギーを食べ物で換算すると・・・

みかん 中1個(60g) 45kcal
おにぎり 1個(110g) 180kcal
日本酒 1合 190kcal
くし団子(しょうゆ) 1本(50g) 100kcal
100kcal消費すると体脂肪が14g減ります(大さじ1強)



1. 池尻稲荷神社

「涸れずの井戸」があり、赤坂から池尻村まで通行する人の飲料水として多くの旅人に利用されました。



2. 三軒茶屋

信楽(後の石橋楼)・田中屋・角屋の3軒の茶屋があったことが地名のおこりと言われています。



3. 大山道道標

不動尊の道標で、正面に「左相州通大山道」側面に右富士・登戸・世田谷道」「此方二子通」という字が刻まれています。



5. 中里旧道

世田谷区内に残る大山道の旧道の一つで、元蛇崩川の畔には伊勢丸稲荷神社があります。



13. 円泉寺

文禄四年(1595)に賢恵和尚によって創設されました。大山詣が盛んになると、その行き帰りにたくさんの方が訪れました。



1 池尻稲荷神社 (池尻 2-34-15)
この神社は京都の伏見稲荷神社から分かれて、明暦年間(江戸時代の初期)に建てられたもので、古くから「火伏せの稲荷、子育て稲荷」として村人の信仰を集めてきました。境内には「潤れずの井戸」があり、昔は赤坂から池尻まで通行する人の

ための飲料水がなかったので、大山道を旅する人々の頼りの水とされたほか、雨乞いのための大山詣の際には、必ず立ち寄ったと言われています。



3 大山道道標 (三軒茶屋 2-13)
三軒茶屋の石橋楼の角に建てられていたこの道標は、寛延2年(1749)建立、文化9年(1812)に再建されたとされ、正面には「左相州通大山道」側面には「右富士世田谷・登戸道」「此方二子通」という字が刻まれています。玉川電車の開通や、東京オリンピックの道路の拡幅などにより、転々と移されましたが、三軒茶屋町会結成50周年記念事業の一つとして元の位置近くに戻されました。



5 中里旧道
三軒茶屋の少し先、蛇崩川遊歩道を跨いで弓形の旧道が残っています。世田谷区内に残る大山道の旧道の一つで、元蛇崩川の畔に「伊勢丸稲荷」があり、その隣に三軒茶屋の大山道標がありましたが、そこが駐車場になるので、郷土資料館に寄託されました。

貞享3年(1686)の庚申塔、正保2年(1645)の地藏尊がひっそりと立っています。



7 駒沢給水所(給水塔) (弦巻 2-41-5)
渋谷町営水道駒沢給水所は、大正13年に、井戸水の衛生上の不安解消や、防火用水の確保のためにつくられました。

水は鎌田2丁目地先の多摩川から取り入れ、砦の上・下両浄水場からこの給水所を経て、目黒・玉川・渋谷方面へ送られていました。多摩川の川底に管を入れて水を取る伏流水方式や、それを加圧して塔に運ぶポンプは、当時としては斬新なものでした。現在は、震災時の応急給水施設として利用されています。



10 久富稲荷神社・伊富稲荷神社 (新町 2-17-1)

久富稲荷神社は古くから新町村の氏神様として人々に敬われてきました。旧大山道に面した139間(約250m)の長い参道には、6本の鳥居が並び、本社に至ります。境内には古木が多く、イチョウやシイ、サワラが区の保存樹木に指定されています。大山道の北側には稲荷様と鳥居がある伊富稲荷神社があります。



11 サザエさん通りと長谷川町子美術館 (桜新町 1-30-6)
マンガ「サザエさん」の作者、長谷川町子さんが桜新町に居住し、マンガの舞台となったこと、長谷川町子美術館が開館したことなどから駅から美術館に向かう道は「サザエさん通り」と名づけられました。サザエさん一家のイラストが通りを彩っています。



の石橋楼)、角屋の3軒で、三軒茶屋の地名のおこりと言われています。大山詣の旅人にも休憩地として利用されていました。



4 正蓮寺 (三軒茶屋 1-10-11)
正蓮寺は、浄土真宗本願寺派に属し、白龍山正蓮寺といいます。元禄10年(1688)に没した竹岡長門の開山で、ご本尊は阿彌陀如来です。創建は明暦3年(1657)現在の港区白金台付近でしたが、道路拡張工事のため明治42年に今の三軒茶屋へ移築されました。



6 宗圓寺 (上馬 3-6-8)
駒留八幡神社の別当寺で、曹洞宗に属し、鎌倉時代後期、北条佐近太郎が開基したと伝えられています。新大山道と堀之内道の交差する場所にあり、江戸初期のものといわれるショウヅカの小堂(風邪の神、せきの御婆といわれる)は信仰を集めてきました。オリンピックの際の道路拡張に伴ない、区内最古と言われる明暦4年(1658)の三猿の庚申塔や六地藏が境内に移されてきました。明治5年(1872)には就学所が開かれ、後にここで旭小学校が開校されました。



8 品川用水路跡 (駒沢 3-22)
品川用水は、江戸時代初期の寛文年間に、熊本藩の細川家の下屋敷の庭に水をひくために玉川上水を分水したのが始まりです。のちに品川領の農業用水に利用され、世田谷領にも分水口ができましたが、品川まで水が届かなくなることから、閉塞されてしまいました。昭和20年代に入ると殆ど埋め立てられ、車道と姿を変えました。



9 善養院 (新町 2-5-12)
善養院は曹洞宗に属し、元和2年(1616)大場豊前守が開基した旧大山道沿いにあるお寺です。万延元年(1860)と明治7年の二回、火事で全焼しましたが、明治17年の本堂建立を機に再興を果たしました。本尊は釈迦如来で、奥には古い30余のお地藏様も祀られています。



12 新町住宅 (桜新町 1丁目～深沢 6丁目)
大正2年から昭和7年にかけて、日本で初めて信託会社による郊外開発のための高級住宅地が分譲され、実業家や軍人、芸術家などが住むようになりました。まちのシンボルとして桜が植えられ、桜並木が元となって「桜新町」という地名が誕生しました。



13 円泉寺と八幡神社
(太子堂 3-30-8 / 太子堂 5-23)

円泉寺は太子堂村の起りとも深い関係があり、賢恵和尚によって創設された文禄4年(1595)以前の鎌倉時代から南北朝時代に遡って、すでに集落が作られ、聖徳太子像が安置されていたという説もあります。創設当時、境内は2250坪もの広さに及び、本堂と太子堂が建ち並ぶ荘厳なものでした。大山詣が盛んになると、その行き帰りに円泉寺を訪れる人も多くなりましたが、安政4年(1857)に火事で焼失し、三年後、檀家の人々により再建されました。

八幡神社は円泉寺別当職として村の西北の地に造られ、氏神様として崇拝されてきました。



15 駒留八幡神社 (上馬 5-35-3)

大山道と堀之内道の交差する場所にあり、鎌倉時代の徳治3年(1308)、この地方の領主だった北条左近太郎の創建といわれています。戦国時代に世田谷城主吉良頼康が、側室「常盤姫」の胎内にいた子を祀ったことから「若宮八幡」とも呼ぶようになったといわれています。



16 松陰神社 (若林 4-35-1)

幕末に活躍した吉田松陰の墓の東側に明治15年に社殿を建てたのが社の始まりです。鳥居をくぐると、左手中ほどに幕末に活躍した吉田松陰の座像が、右手奥には松下村塾を模した家があり、頼三樹三郎など同士6人の墓があります。



19 大吉寺 (世田谷 4-7-9)

開基は天正6年、号を護国山天照院と称し、浄土宗に属する寺で、川崎市小田中の泉沢寺の末寺として創建されました。本尊に阿弥陀仏(銅像)を祀るほか、正観音菩薩、釈迦誕生仏などを祀り、明治10年の記録には、境内は500坪余の中に立派な本堂、庫裡などが建てられていて、杉の木立190本余りが深閑とした域を保っていたことがわかります。



22 世田谷代官屋敷 (世田谷 1-29-18)

世田谷代官屋敷は江戸時代彦根藩世田谷領の代官を代々務めた大場家の居宅で、昭和27年東京都の史跡に、昭和53年には主屋表門が国の重要文化財に指定されました。また、敷地内には昭和39年世田谷区の郷土資料館が建設され、区内の考古資料、中近世古文書、民族資料等多数が所蔵され、折々に展示されています。



14 教学院
(太子堂 4-15-1)

竹園山最勝寺教学院といい、慶長9年(1604)玄応和尚の開基により江戸城内紅葉山に建てられたとされ、その後数か所を経て、明治41年に太子堂村に移転しました。

本尊には恵心僧都の作による阿弥陀如来と、聖徳太子作といわれる聖観音像が安置され、不動堂の目青不動は東都五色不動の一つとして知られています。



17 勝國寺
(世田谷 4-27-4)

青龍山勝國寺と称す新義真言宗豊山派の寺院。開基は吉良政忠と伝えられています。吉良家の居館・世田谷城の鬼門除けとして薬師如来を祀り、吉良家代々の祈願所としたのが起りとされ、創建時期は15世紀後半に遡る可能性があります。薬師堂の薬師如来像と日光菩薩像は、世田谷区指定有形文化財です。



20 円光院
(世田谷 4-7-12)

天正年間(1573～1591)に盛尊によって開基され、元和6年(1620)に勝國寺第二世住職によって建立された記録が残されています。当時は朱塗りの山門、本堂、閻魔十王堂、庫裡があったとされますが、その後主要な建物は何度かの強風で倒壊し、天保年間(1830～1843)になって本堂が修理されました。本尊の不動尊は空海上人の作といわれています。明治12年、村に初めて桜小学校が創立された時の仮校舎は、この円光院でした。

18 世田谷城趾公園
(豪徳寺 2-14-1)

現在、城趾公園といわれている所が吉良氏が築いた世田谷城の趾です。初代治家が、南北朝のころ戦さの手柄により足利氏から武蔵野国世田谷郷をもらい、そこに築城したのが始まりといわれます。

当時の城のごく一部の空堀と土塁だけが残っています。



21 天祖神社 (世田谷 1-23-5)

明治26年の役所提出の記録(天祖神社明細帳)では、「明暦年間(1655～58)当地氏子信徒が創建」とあります。かつて、社殿は今の鳥居の位置にあり、社務所はその裏にあったということです。

23 ボロ市
(世田谷 1)



世田谷のボロ市は、天正6年(1578)小田原の北条氏政が世田谷新宿に「楽市」を許可した事が始まりで、月6回開いていたことから「六斎市」とも呼ばれました。その後、北条氏が滅び、江戸の開府、市中の発展とともに楽市は次第にその役目を終え、年1回開かれる「歳の市」と性格が変わりました。代官屋敷際の大山道には遠方から商人が荷物を持ち込み、正月を迎える前の当地方の年中行事となったようです。明治を迎え、旧暦から新暦に切り替わった際に、12月と1月の15・16日に開かれるようになりました。また、正月用品や農具のほかボロを売る店が多く出ることから、人々はこの市を「ボロ市」と呼ぶようになり、今に至っています。



24 浄光寺 (世田谷 1-38-20)
九品山往生院といい、浄土宗西応寺の末寺で、創建は文安元年(1444)、本尊に阿弥陀如来坐像が祀られています。観音菩薩像ほか多くの所蔵品が残されているほか、境内内には寛文2年(1662)造立の地藏立像などが祀られ、古い由来を伝えています。



25 常在寺 (弦巻 1-34-17)
宝樹山常在寺といい、日蓮宗総本山久遠寺の末寺で、吉良頼康の側室・常盤御前の寄進寺といわれ、本尊は釈迦牟尼仏を祀っています。他に鬼子母神、日蓮聖人を祀っています。
常在寺近く(弦巻 1-41)の小さな祠には、いぼとり地藏がありますが、1751年に弦巻村の女性21人によって造立されたものです。



26 実相院 (弦巻 3-29-6)
鶴松山実相院といい、曹洞宗のお寺で、開山は古く慶長11年(1606)5月で、ご本尊には薬師如来が祀られています。北条氏滅亡のあと、一度は世田谷城を捨て下総(千葉)に逃れた吉良氏朝が、その後、徳川家康に許され世田谷に戻って隠遁生活を送り、ここに葬られています。その後徳川幕府から、御朱印寺として石高十石二斗二升を頂き、明治まで手厚く保護されてきました。実相院の界限は世田谷百景にも選ばれています。



27 用賀口道標 (弦巻 5-16)
用賀方向への大山道と登戸道との分岐点にあった道標。自然石の大きなもので、不動尊の種字の下に大山道とあり、右登戸道と刻んであります。
延喜3年(1746)に建てられたもので、原物は世田谷区立郷土資料館に移されています。



28 八幡社と大山道旅人の像
(弦巻 4-32)

この旅人像は昭和60年3月、世田谷区が大山道児童遊園を開設した時に作られたものです。この場所は南に蛇崩川の源流が流れていた窪地で北側には八幡社が祀られていました。
往時の八幡社は明治時代の末、弦巻神社に合祀され、今はその跡地に小祠が残っています。



29 野中の地藏
(弦巻 4-2)
用賀口から用賀追分を結ぶ大山道沿いにある丸彫りの地藏尊で、天保3年(1832)に建てられました。



30 大山道追分の庚申塔 (用賀 3-14)
江戸から相模に向かい新・旧の大山道はここで合流、この辺りには醬油屋、紺屋、油屋、酒屋、料理屋等が軒を並べ、用賀村の中心として賑わっていました。文政10年(1827)この追分に道標を兼ねた庚申塔が建ち、『右江戸道、左世田谷四谷道』と刻まれていました。今、この庚申塔は世田谷区立郷土資料館の中庭に移設展示してあります。



31 用賀神社 (用賀 2-16-26)
かつて「神明社」と呼ばれ、その創立の年代は不明ですが、明治41年に一緒に祀った八幡社は、天正年間に鎌倉の鶴岡八幡宮より分霊を迎えたといわれています。この明治41年の合祀の際には、上用賀にあった天神社も合わせて祀られました。



32 真福寺
(用賀 4-14-4)
真言宗智山派に属し京都にある総本山智積院の末寺です。ご本尊は金剛界大日如来、大日堂には珍しい石仏の胎藏界大日如来が安置されています。創建は400余年前、永禄時代と推定されており、開山は宗円和尚、開基は用賀村を開いた飯田図書です。境内には芭蕉句碑(「道のべの木槿は馬に食はれけり」)や宝篋印塔(願主は後の世田谷領代官飯田吉純、1736年建立)が建っています。



33 玉電用賀駅跡
(用賀 4-3)

用賀駅は、明治40年4月に、玉川電気鉄道の三軒茶屋～玉川間が開通したことに伴ってできた駅で、電車の折返所があり、駅前にあった用賀梅林には、赤坂や青山方面から子どもたちが遠足にきました。
自家用車・トラックの増加により、その後衰退。「バス路線の新設」「新玉川線建設」を条件に昭和44年5月に廃止され、駅も姿を消しました。



34 無量寺
(用賀 4-20-1)
浄土宗鎮西派のお寺で、東京芝の西応寺の末寺です。文禄元年(1592)に光蓮社明誉上人の開山によるものと伝えられています。ご本尊は阿弥陀如来座像です。観音堂には行基の作といわれる十一面観世音菩薩像が祀られ、観音堂の正面には、『大悲殿』と書かれた菊池容斎による扁額がかかげられています。本堂前には樹齢100年を超える大銀杏があり、境内の風景は世田谷百景の一つに選ばれています。また、かつて、観音講が盛んであった頃、当寺の観音菩薩は各村々を巡行したとの事です。



35 田中橋 (玉川台 1-13)
ここは下流で等々力溪谷を形成する谷沢川が流れている所で、文字通り大山道は田んぼの中の橋を渡った為、古くから『田中橋』と呼ばれていました。明治40年に開通した玉川電車も通行人と一緒にこの橋を渡っていました。



36 延命地藏
(玉川台 2-3)

相模に向かう大山道は、ここから二股に分かれます。右の道を行くと慈眼寺前の急坂を下り、二子の渡し場に、また、左の道を進むと行善寺、法徳寺のそばを通る少し緩やかな坂道を通って同じく二子の渡しへ。この地藏尊はその道標を兼ね、安永6年(1777)用賀村の女念佛講中により建てられたものです。



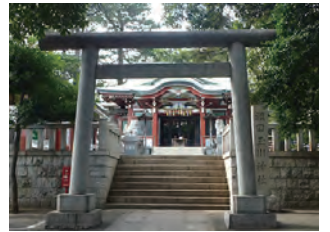
37 大空閣寺 (瀬田 4-21-15)
大空閣寺は玉川八十八番札所の中、三十八番札所になっています。境内には古い観世音菩薩が祀られ、入り口には昭和5年建立の両石柱に地藏菩薩、虚空蔵菩薩と刻まれています。



38 慈眼寺 (瀬田 4-10-3)
開基は徳治元年(1306)に権大僧都法印定音によるものとされ、この村で最も古いお寺です。橘樹郡小杉村最明寺の末寺で喜楽山教令院という新義真言宗に属します。初めは修験の地でこの崖下にありましたが、後に今の場所に移して慈眼寺と名づけられました。



39 笠付庚申塔 (瀬田 4-11)
この庚申塔は、”見ざる、言わざる、聞かざる”の三猿の上に三つ目・腕六本の青面金剛が刻まれている典型的な江戸中期のもので、元禄10年(1697)2月20日造と刻まれています。



40 瀬田玉川神社 (瀬田 4-11-31)
明治41年に改称するまでは御嶽神社でした。大山の夏山開きの7月27日には瀬田玉川神社の境内に大山灯籠を立てていました。木製の灯籠の火袋には「五穀豊穰・家内安全」と書かれた障子紙の戸がはめられました。日照りが続き雨乞いの時は、村人がここに集まり、代表が多摩川で身を清め、大山のお水をいただき、途中休むとそこに雨が降るというので一気にここまで運びました。神社に納めると、畑の四隅にまいて慈雨を祈りました。



41 身延山関東別院 (玉川寺)
(瀬田 4-12-4)

昭和7年に建てられました。昭和6年が日蓮上人の入滅650年にあたり、これを記念して本山で別院を作る予定だったところ、当時砂利運搬が多かった玉川電気鉄道が人を呼び込むために地主の方に相談して借地を無料で提供してもらい、建立の運びとなりました。駅名も「遊園地前」から「身延山関東別院前」と変更されました。



42 両親閣東京別院 (瀬田 4-13-4)
両親閣東京別院は、日蓮聖人の両親の廟所のある小湊妙蓮寺両親閣の東京別院として昭和6年に建立され、昭和25年に敬親玉川教会(別称両親閣東京別院)と改称しました。



43 玉電砧線中耕地駅跡
(玉川 3-20)

東急玉川線の支線だった砧線は、大正13年3月1日に開通しました。当時は玉川電気鉄道といい、玉川から砧までの単線で、途中、中耕地・吉沢・大蔵の3駅があり、2.1キロの行程でした。開通当時は川砂利運搬用でしたが、乗客用になってからは釣り人の利用も多かったようです。昭和44年に廃止されました。



44 諏訪神社
(玉川 3-26-5)

文明年間(1469～86)に建てられたと伝えられ、大水によって川上から流れてきた像を拾い上げて祀ったのがはじまりとされています。かつては大きなケヤキの林があり、多摩川を往来する川舟や筏の目標にされていました。



45 行善寺
(瀬田 1-12-23)

永禄年間(1558～69)に北条氏直臣の長崎伊予守重光父子がこの地に移住した際に、小田原の菩提寺道栄寺を今のところ

に移し、重光の法号行善をとって行善寺と名づけました。宗派は浄土宗です。高台にある境内からの眺望は素晴らしく、江戸時代、徳川家斉や家慶も立ち寄っています。また、行善寺八景として版画にも描かれています。



と身体が温かくなることから行火坂とも呼ばれています。坂は三度も削ったので行善寺の山門は三段の土台の上に建っていました。

46 行善寺坂・行火坂
(瀬田 1-12/瀬田 1-9)

行善寺坂は勾配が急で、この坂を登ると身体が温かくなることから行火坂とも呼ばれています。坂は三度も削ったので行善寺の山門は三段の土台の上に建っていました。



47 法徳寺
(瀬田 1-7-7)

今から400年余り前、永禄時代に源蓮社宗誉上人が開山、足利氏家臣白井五良左衛門法徳によって開基されたと伝えられています。浄土宗で正式の名は福来山寿光院法徳寺。ご本尊は阿弥陀如来です。境内には、嘉永6年(1853)に開かれ、門弟300人を超えたと云う寺子屋『芝光堂』の師、大塚貞三郎を称える筆塚や、当寺の墓所に眠る歌手江利チエミの追慕像が建っています。



48 次大夫堀脇の道標
(庚申塔) (玉川 2-14)

江戸時代の初め、慶長年間に幕府の命令で代官小泉次大夫が計画を進めた農業用水の一つに『六郷用水』があります。次大夫堀とも呼ばれ、今は丸子川と命名されています。その脇にある道標は、庚申信仰が盛んだった頃に建立されたもので、瀬田村の庚申供養講中が安永6年(1777)に建てました。この庚申塔は道しるべを兼ね、『南大道 左 西 赤坂道 右 東 目黒道』と刻んであります。



49 二子の渡し跡
(玉川 1-7)

寛文9年(1669)に溝口と二子の宿が定められ、同年矢倉沢往還の継立村に指定された二子村が渡しを請負っていました。天明7年(1778)、瀬田村にも渡し舟の許可が下りて、川の流れの関係から、瀬田村側の岸には二ヶ所の発着所が出来ました。大正14年(1925)、二子橋が完成し、二子の渡しはその役目を終えました。



50 兵庫島
(玉川 3-2)

正平13年(1358)、新田義貞の子、義興が従者13人を連れて鎌倉に向かう途中、稲城矢口の渡しで江戸遠江守と竹沢右京亮に謀られ、川の真ん中で舟底の栓を抜かれ、兩岸からの攻撃を受けて自害しました。従者の一人、由良兵庫助の首が流れ着いたことから「兵庫島」という名がついたと伝えられています。